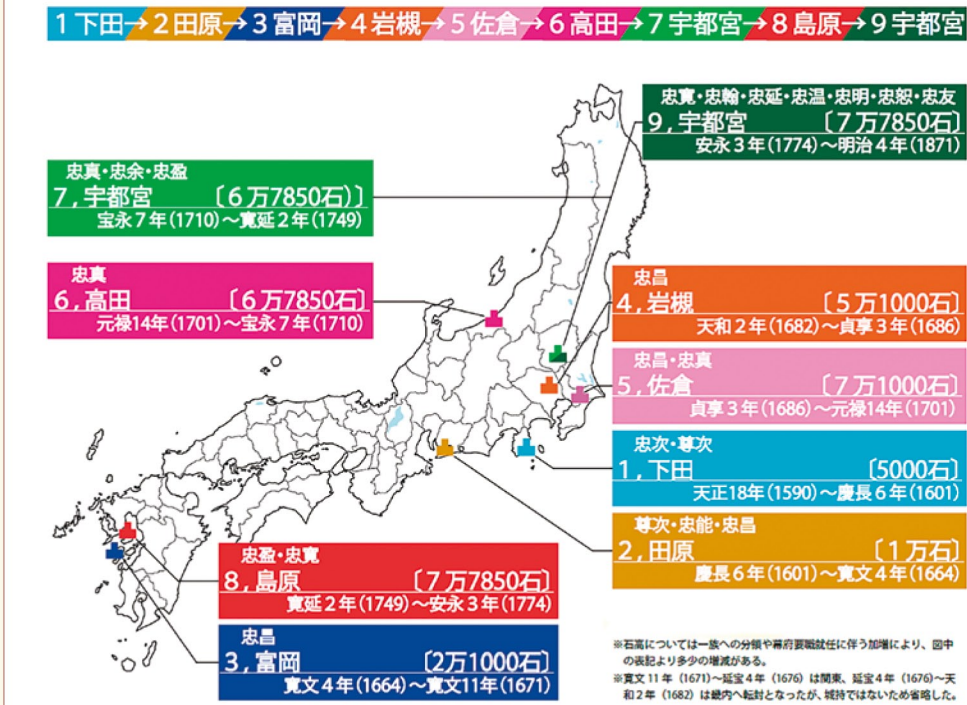


資料3 戸田山城守忠温と記された「天保武鑑」

図1 宇都宮戸田氏主な転封の変遷



島原へ転封、再び宇都宮藩主に

忠盈が藩主となった三年後には、肥前国島原（現、長崎県島原市）藩主の松平氏との交代で島原へ転封となったが、その二十五年後の安永三年（一七七四）、再び島原から宇都宮に戻った。忠盈の弟で四代目藩主となった忠寛は、大坂城代や京都所司代を勤めるなど、幕政にも関与した。しかし、島原からの領地替えや將軍の日光社参、狷官運動などに莫大な費用がかかり、これらは以降の藩財政に重くのしかかることになった。五代目藩主忠翰は、鹿沼出身の町人鈴木石橋の学識と窮民救済などの活動を評価し、彼を藩儒として迎えた。忠翰自身は、幼いころから絵を好み、南蘋派の画人として殿様芸の域をはるかに超える、本格的な作品を数多く描いた。続く六代目藩主の忠延は、藩主就任の直後に、『善行録』を作成した。これは、延享四年（一七四七）から文化六年（一八〇九）

までに藩主から褒美を受けた一五七人の善行を記録したもので、農業精出者や実直者、貞節者、潔白者、孝心者が取り上げられている。このように領民の模範を例示することで、領民の教化に努めた。そして、文化年間の藩政改革の一環として、藩士の教育を行う藩校「修道館」を設置した。「修道館」には、講義を行う「学館」はもちろん、柔術・剣術・槍術・弓術など武芸各種の稽古場も設けられた。「修道館」では江戸への遊学も認められており、ここから巣立った藩士たちの中には幕末の宇都宮藩の危機に活躍した者もいたのではないだろうか。

### 財政難に苦しむ戸田氏

続く七代目藩主忠温は、奏者番・寺社奉行・老中（資料3）と順調に出世し、紛糾する幕府の対外問題に対処した。また、

### 藤原氏の流れをくむ戸田氏

戸田氏の由来については諸説あるが、藤原氏の流れをくみ、十五世紀の宗光の代に戸田を名乗ったとされる。宇都宮藩主戸田氏の系統は、宗光の曾孫、光忠の代に分家した。そして、光忠の子・忠次（資料1）が徳川家康（資料2）に仕え、数々の戦いで功を立て、小田原城落城後の家康の関東入封に従い、伊豆国下田（現、静岡県下田市）五千石を拝領、宇都宮戸田

氏発展の基礎をつくった。さらに忠次の子尊次が関ヶ原の戦い等の恩賞として三河国田原（現、愛知県田原市）一万石を拝領し、江戸時代を迎えた。その後、尊次の孫忠昌が肥後国富岡（現、熊本県天草市・武蔵国岩槻（現、埼玉県さいたま市）・下総国佐倉（現、千葉県佐倉市）と転封し、京都所司代や老中といった幕府要職を歴任した。また、その度に加増を受け、石高は一萬石から七万一千石と大幅に増加した。戦のない平和な時代の加増としては



資料2「徳川家康像」



資料1「徳川家康二十将図」より戸田忠次像

### 徳川幕府の重職を担った忠真

この忠昌の後を継いだのが子の忠真である。忠真は殿中で吉良義央（上野介）への刃傷沙汰が原因で切腹になった浅野長矩（浅野内匠頭）に代わり、急遽勅使御馳走役を務めた人物である。その後、佐倉から越後国高田（現、新潟県上越市）に転封となった。宝永七年（一七二〇）、忠真は宇都宮へ転封、ここに戸田氏の宇都宮藩主としての治世が始まった。以後、約四〇年にわたって戸田氏の宇都宮統治が続いた。忠真

中世、宇都宮を四〇〇年以上の長きにわたって治めたのは、関東を代表する名族宇都宮氏であった。その宇都宮氏も慶長二年（一五九七）に豊臣秀吉によって改易となり、その支配を終えた。その後の約一〇〇年間は蒲生・奥平・本多・松平・本多・阿部の六家がめまぐるしく入れ替わる藩主交代の時代となった。そうした状況の中、戸田氏は宇都宮藩主となり、途中、一時転封となったが、明治維新に至るまでの約三三〇年間、宇都宮藩主として宇都宮を治めた。

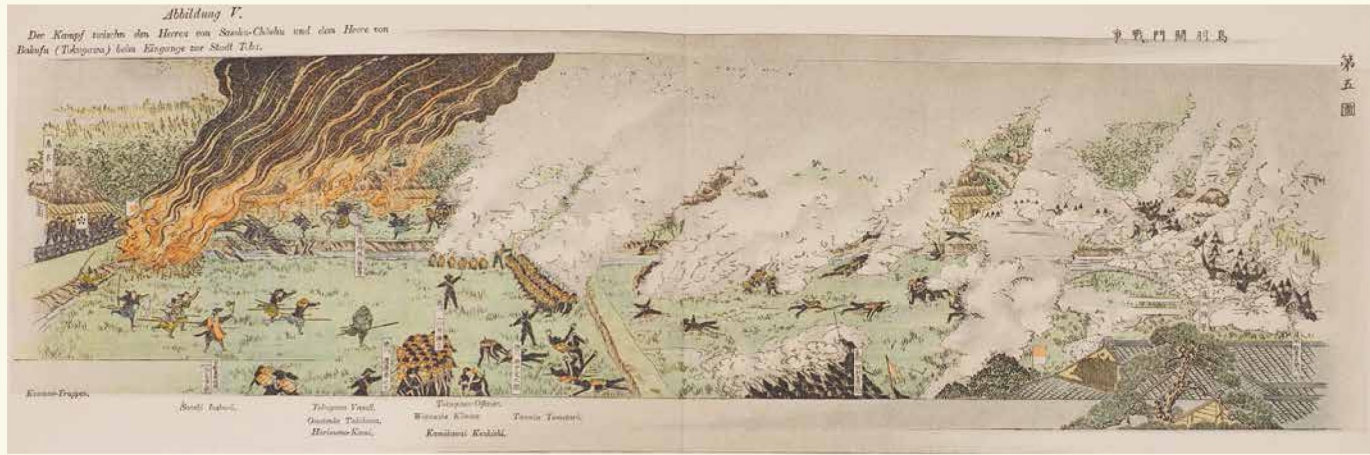
## 譜代大名 戸田家の藩政と事績

栃木県立博物館主任研究員 飯塚 真史

が宇都宮に入った四年後には父忠昌同様、老中に就任し、藩政だけでなく幕政も担当した。特に、老中としては七代將軍家継と八代將軍吉宗に仕えている。忠真の足跡がうかがえるものとして、宇都宮二荒山神社に奉納された太刀・拵、さらには家臣の名が列挙された「流鏑馬弓矢奉納状」が遺されている。また、忠真は塩原で湯治と狩りを行っており、関係資料によると、二日間狩りを行い、二日も鹿を仕留めたようである。

宇都宮藩主戸田氏の二代目は忠真の甥の忠余が、三代目はその次男忠盈が継いだ。忠盈の時代には農村荒廃について触書を出しているが、この中で間引き（口べらしのために生まれたばかりの子を殺すこと）は法令違反であり、人道にも反し





資料 7 「戊辰戦争画卷縮写錦之御旗」より鳥羽伏見の戦い

にも天狗党追討命令を下すが、思想的にも、人脈的にも関係の深い藩士が多く、天狗党に加わる藩士もいた。そのため、忠恕は幕府から坂下門外の変と合わせて藩士の管理責任を問われ、藩主忠恕の隠居・減封の上、陸奥国棚倉（現、福島県東白河郡）へ転封を命じられるなど藩は絶体絶命の窮地に追い込まれた。その頃、一〇〇以上の陵墓を修補が完了した。これが朝廷より評価され、さらに朝廷側から幕府への働きかけもあり、終に処分撤回に成功した。

戊辰戦争で新政府軍につき奮闘、一万石加増

ところがほととしたのも束の間、慶応四年（一八六八）、鳥羽・伏見の戦い（資料7）を皮切りに戊辰戦争が勃発した。同年二月、忠恕のあとを継ぎ藩主となった忠友は、徳川慶喜の助命嘆願のため上洛するが、その途中、近江国大津（現、滋賀県大津市）で新政府側に抑留されてしまう。四月には、江戸城が無血開城されたが、大島圭介を中心とする旧幕府の精鋭部隊は降伏せず、日光を目指し北上を始めた。



それに備えるため、急遽、前藩主・忠恕が宇都宮城に入った。しかし、新政府軍の支援は少なく、旧幕府軍との戦いの末、宇都宮城は落城した。城は四日後に新政府軍によって奪還されたが、その後も下野での戦いは半年にわたって展開され、宇都宮藩は各地で奮闘した（図3参照）。激戦の中、官軍の士気を高めるため、宇都宮藩に下賜された。その際のものと思われる「菊花紋官軍旗（白生絹御紋之旗）」が伝わっている。戦後はこの時の藩の活躍が評価され、一万石加増となった。

その後、明治二年（一八六九）の版籍奉還、明治四年（一八七二）の廃藩置県を経て、長きにわたる戸田氏の宇都宮統治はついに終わりを迎えた。

### 安定した堅実な藩政を行った 宇都宮藩主戸田氏

このように、宇都宮藩主戸田氏は譜代大名として、幕府の要職を歴任しただけでなく、領民教化や農村のたてなおしにも心血を注ぎ、明治維新まで約三〇年にわたって、宇都宮藩を治めた。江戸時代、特に後半は一揆や打ちこわしが頻発した、非常に不安定な時代であった。しかし、戸田氏治世下の宇都宮藩ではそうしたことがほとんどなかったことから、戸田氏の歴代藩主は安定した堅実な政治をおこなっていたと言えるのではないだろうか。

※掲載した資料は全て栃木県立博物館蔵



資料 4 「戸田日向守より  
拝領御紋散三組御盃」

農村が荒廃していた。農村が荒廃したこと年貢収入も減り、宇都宮藩の財政もより逼迫していった。こうした事態を打開すべく、忠明は宇都宮から出て江戸で財をなした菊池教中（資料5）に宇都宮へ戻り、開発領主になるよう求めた。一時的な年貢免除などの優遇措置と引き替えに新田開発をせよというのである。これに対し教中は、開国による経済の混乱や江戸の佐野屋の店舗が災害に遭った際の、自己の経済基盤の備えとして、この求めに応じたようである。こうして両者の利害が一致し、新田開発が実施された。これにより鬼怒川沿いの広大な土地が開墾された。教中はこの功績により武士（宇都宮藩士）の身分となった。こうして忠明は財政難の中、商業資本を利用することで、年貢収入を増やすことに成功した

### 坂下門外の変に 宇都宮藩士が関与

忠明が十八歳で病死すると、十歳の忠恕が九代目の藩主となった。この頃の日本では尊王攘夷思想（朝廷を敬い、外国を打ち払うべきだとする考え）が広まり、また、開国により生じた市場混乱により、人々の生活は徐々に苦しくなっていた。そして人々の不満は、開国を主導した幕府に向けられるようになっていった。宇都宮藩でも忠温の治世に藩儒となった大橋訥庵（資料6）の影響により尊王攘夷思想が浸透し、藩士の中には幕府への不信感を強める者もいた。こうした状況の中、安政七年（一八六〇）、ついに志士たちの不満は大老・井伊直弼の殺害という形で表面化した（桜田門外の変）。将軍に次ぐ大老が殺害されたことで幕府の権威は失墜した。そこで幕府老中であつた安藤信正は、権威回復のために朝廷の力を利用する公武合体策を推し進めた。しかし、この政策は尊王攘夷派の志士たちを刺激し、さらには皇女和宮を降嫁させた

### 歴代天皇の陵墓修復 朝廷より評価

ことでその怒りは頂点に達した。宇都宮藩では、大橋訥庵や菊池教中の主導により、老中・安藤信正を襲撃した坂下門外の変が引き起こされた。この変自体は失敗に終わったものの、この事件に宇都宮藩士が関与したことにより、忠恕は幕府から睨まれることになる。

そのような状況において、起死回生の策として打ち出されたのが、山陵修補である。山陵修補とは、当時荒れ果てていた歴代天皇の陵墓を修復するというものであつた。この事業を実施することで、朝廷はもちろん、公武合体を推し進める幕府からも評価されることを狙っていたのである。しかし山陵修補実行中、尊王攘夷を叫ぶ水戸藩改革派（天狗党）が筑波山で挙兵する（天狗党の乱）。幕府は宇都宮藩



資料 6 「人物像伝」より大橋訥庵像